慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	船津辰一郎前奉天総領事より 出淵外務次官宛満洲・中国出張現地報告書簡： 大正十四年十二月より同十五年二月まで
Sub Title	Letters from former-consul-general Funazu at Mukden to Vice Minister of Foreign Affairs Debuchi about political conditions in China and Manchuria (Dec. 1925-Feb. 1926)
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.7 (1963. 7) ,p.81- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19630715-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

船津辰一郎前奉天総領事より出淵外務次官宛満洲・中国出張現地報告書簡

――大正十四年十二月より同十五年二月まで――

池井優

ここに紹介するのは、大正十四年暮から十五年初頭にかけて満洲・中国各地（奉天、大連、漢口、南京、上海、青島、済南）を視察した船津辰一郎前奉天総領事が出淵勝次外務次官に宛て現地から発した私信の形での報告である。船津は明治二十九年芝罘領事館書記生を振出しにその外務官吏としての活動を殆んど中国で過し、大正十五年民間人となつてからも、昭和十二年の日華事変による対華国交調整工作、同十五年十月重慶政府との和平工作所謂「船津工作」の推進者として知られる人物である。これら船津の外交官、あるいは民間人としての活動は、船津の残した日記を基として作成された在華日本紡績同業会編「船津辰一郎」（昭和三十三年発行　非売品）に詳しい。

大正十四年八月船津は奉天総領事の地位を吉田茂に譲り、一時帰国することとなつた。そして同年十二月三日付で臨時外務省事務に従事することとなり、中国に出張して時局調査を兼ねて外務大臣の現下に処する方針を各地領事に伝達することとなつた。当時中国は第一次、第二次奉直戦争を経て、郭松齢事件の直後であり、張作霖と馮玉祥を中心に覇権が争われている時であつた。本書簡は、これら軍閥の混戦の時期に船津が華北、華中、華南にわたつて中国側要人と会見し、その会見記と船津自身の感想を書き送つたものである。郭松齢事件については外務省、参謀本部等の記録も残存しており、[1] 最近それらに基く研究も為されている。[2]

本書簡は郭松齢事件直後の時期において、白川関東軍軍司令官の警告に対する反応（第一信、第五信）、張作霖をめぐる動き（第一信）、

関東軍および現地外務省出先機関の動き（第四信）、呉佩孚をめぐる動き（第六信）、南京、上海の動向（第八信、第一〇信）、靳雲鵬の日本訪問について（第一一信、第一四信）、船津の中国政局の分析（第一二信、第一三信）、段祺瑞の境遇（第一五信）、等を含み、当時の中国、日中関係を理解する上の好資料であると思われる。

（1）外務省記録『反奉天派紛擾一件』、関東軍参謀部『張郭戦に於ける支那軍隊に関する諸観察並びに本戦乱に関連する諸問題』等

（2）臼井勝美「幣原外交覚書」（『日本歴史』一二六号所収）、江口圭一「郭松齢事件と日本帝国主義」（『人文学報』一七号所収）

一　大正十四年十二月十五日発信

謹啓、益御清祥奉賀候。陳ハ小生拝別後道中無事去る十日奉天着（ママ）（預定よりも一日早く）各方面奔走、一昨十三日夜奉天発、昨朝当地着、昨日ハ旅大往復、本日の便船にて天津に赴く筈に御座候。松岡氏の熱心に宣伝し居るる赤化の危険云々ハ、当地方の人も既に承知し居り、満鉄及軍閥方面にて松岡氏と同様の議論を為し居るも、其他の方面ハ極めて冷淡にて余り共鳴するもの無く様見受けられ候。何れ詳細天津着の上御報可申上候へ共、今回ハ別紙の通り聞込みしたる雑報数件御参考迄貴覧に供し候。先ハ汽船乗込前取急き右迄　草々

十二月十五日大連にて　船津生

出淵老台　侍史

別紙

警告ニ対スル（奉天地方）一般ノ批評

今回白川軍司令官ノ発シタル警告ハ、張軍側非常ナル強味ヲ湧サシメタル観アリ。日本政府従来ノ態度ニ顧ミ、突如今回ノ如キ警告ヲ発スルニ至リニハ（ママ）一般ノ聊カ意外トスル所ナリ。張カ一旦下野ヲ決シタルニ拘ハラス、遽カニ意ヲ翻カヘシ今ヤ城ヲ枕ニシテ戦死ノ覚悟迄スルニ至リタルニハ、全ク此警告ノ結果彼等最後ノ安全ヲ確保スル見込ツキタル為ナラン（現ニ楊宇霆ノ如キモ、小官ニ対シ、若シ巨流河ノ線ニテ不幸敗戦スレバ、奉天城ニ立籠リ飽迄防戦スル積ナリ、蓋シ奉天ハ鎮威将軍ノ居城ナルヲ以テナリト云ヘリ）。随テ日本政府モ最近稍援張政策ヲ加味スルニ至リタルニ非ルカ。目下奉天ニ於ケル張派及顧問連等ハ、張軍万一敗北ノ場合ハ奉天城ニ逃込ミ日本軍ヲシテ郭軍ノ殺□（判？）ヲ共同防禦ノ已ムナキニ立至ラシメントノ下心アルニ非スヤト疑フモノアリ。何レニシテモ一時（本月六、七日頃）民心ノ動揺極度ニ達シタルモ、右警告発表後日本軍ヲ奉天ニ集中セシ結果人心大ニ鎮静ニ帰シ、内外人共稍安堵スルニ至レリ。外国人方面モ今回ノ警告ハ張ニ多大ナル援助ヲ与ヘタルト同様ノ結果ヲ齎ラシタル事ト観察シ居ルモノ、如シ。

附記

白川軍司令官ハ警告ヲ発シタルモ之ヲ実行スルニ当リ、之ニ伴フ具体的訓令不備ノ為非常ニ困リ、不得已同司令官ヨリ突ヲ具シテ請訓シタルモ、確定的回訓遅延ノ為目下既ニ発生シタル営口ニ於ケル郭軍進入問題ニ関シテモ其処理上非常ニ困難ヲ感シ居ルト

テ、暗ニ外務省ノ措置敏活ヲ欠ク事ヲ非難スル如キ口吻ヲ洩ラシ居リタリ。

張作霖訪問

十二月十一日午後張作霖ヲ往訪シタルニ、彼ハ意気銷沈、心中悶々ノ情ニ禁ヘサルモノ、如シ。久濶ヲ叙シタル後大要左ノ如ク語レリ。支那政局ノ変化余リ急ニシテ万事意表ノ外ニ出ツ。殊ニ最近郭ノ謀叛ハ更ニ夢想ダニセザリシ。彼ハ奉天人ニシテ現ニ其父母共ニ此地ニ在リ（張ハ之ヲ殺シタル旨外間ニ伝ヘ居ル由ナルモ右ハ全ク無根ノ謬言ナリト確言セリ）。彼ハ一時不遇ニテ、曾テ広東方面ニ流浪シ孫文一派ノ空気ニ親ミタル事アリシカ、予ガ之ヲ起用シテ以来職務ニハ極メテ熱心、相当役ニ立ツヨリ漸次之ヲ重用シ殊ニ学良ト最モ親シキ関係上（学良ノ講武堂ニ在学中郭ハ教官タリシ事アリ、言ハバ師弟ノ関係モアル様ナリト）且ツ安直戦争以来第一、第二、奉直戦争ニモ抜群ノ功労アリシヲ以テ、益彼ヲ重用シ自分ハ殆ント彼ヲ学良ト同様ニ思フテ寵愛ヲ加ヘツ、アリシニ、料ラサリキ今回ノ如キ支那ノ道徳上実ニ許スヘカラサル罪悪ヲ敢行スルニ至レリ、外間ニハ今回ノ奉直戦後論功行賞ノ際彼ハ督軍ノ地位ヲ獲サリシヲ不満ニ思ヒ今回ノ挙ニ出テタリナド評スルモノアルモ、其実彼ハ予カ督軍ノ地位ヲ与ヘントセシモ彼ハ之ヲ辞シ引継キ軍隊統率ヲ希望セリ。今日ヨリ過去ヲ回想スレバ種々思当ル事モアルガ、要スルニ学良ガ年少無経験、郭ヲ過信セシ結果ニ外ナラス。而シテ学良ノ言ヲ信シタル自分モ亦不明ナリシ。嗚呼天命ナリト諦ムル外ナシ。郭ハ今ヤ全然赤化シ、奉天ニ在リシ妻女ハ呼寄セタルモ、父母ハ其儘放棄シテ顧ミサル位ナレバ、人情モ義理モ眼中ニナシ。今ハ最後ノ一戦ヲ為スヘク決心シ着々準備中ナリ。兵数ニ於テ郭ト余リ大差ナシ（郭軍約三万ト云フ）。武器ニ於テハ郭軍ニ勝ルトモ劣ルナシ。呉俊陞今十一日着奉シ張作相モ明日頃着奉スベク（張ハ既ニ十二日着奉セリ）何レモ相当ノ部隊ヲ戦線ニ送ル事トナリ居ルヲ以テ我軍ハ兵数ニ於テ漸次優勢トナリ居レリ、勝敗ハ勿論兵ノ多寡ニヨラサルモ余リ悲観スルニ及ハサルベシ。若シ不幸敗戦トナラハ城ヲ枕ニシテ死センノミ（強ク文句ヲ言ヒナガラモ体度何トナク落付カヌ）。予ガ死後満洲ハ愈々赤化シ、日本カ如何ナル影響ヲ受クルカヲ見届クル能ハサルヲ遺憾トス。過日「カラハン」北京ニ向フヤ天津ニテ百四十万弗ヲ郭松齢ニ送ラントセシモ、其中四十万弗ハ無事郭軍ニ届キシモ、其余ノ百万弗ハ李景林ノ為ニ没収セラレタリ云々。

在奉天支那人ノ張作霖ニ対スル態度

附　張作霖及王永江等態度

張作霖カ今尚奉天地方ニ於ケル実権ヲ握リ居ル関係上、表面彼ニ対シ彼是云為スルモノ少キモ、各方面ノ情報ヲ綜合スルニ、多数民心ハ確カニ張ヲ去リ居ルモノ、如シ。但シ一部張作霖擁護論者ノ主張スル理由ハ、郭松齢若シ来ラハ東三省全部ハ勿論、奉天省ト雖モ充分之ヲ統治シ得ルヤ疑問ナリ。或ハ当分常ニ不安定ノ状態ニ置カルヽヤモ計リ難シ。然ラハ余リ善政ハ布カサリシモ、兎ニ角過去十余年間東三省ノ首脳トシテ比較的太平無事ニ治メ来リシ張作霖ヲ依然

存続セシムル方、得策ナラスヤト云フニ在リ。王省長目下ノ態度ハ、表面張ノ地位擁護ニ熱心ナル如キモ、其実同時ニ自己ノ地位ヲ擁護セントスルモノナリ。王ハ既ニ家族ヲ安全地帯タル日本ノ金州（王ノ郷里）ニ送リ、何時ニテモ自分ノ避難ニ差支ナキ準備出来居ルヲ以テ、時局ノ推移如何ニ対シテハ極メテ冷静ナル態度ヲ持シ、案外平然タルモノアリ。尤モ本月六日、七日ハ未タ逃仕度出来居ラサリシ際トテ、其周章狼狽ハ一方ナラサリシト云フ。想フニ王省長ハ張勲没落スレバ安全地帯タル金州ニ逃ケ込ミ、奉天省民ナリ、或ハ張ノ後継者カ行政ノ任ニ当ラン事ヲ懇望スレバ、王ハ多分之ヲ引受クルナラントハ一般ノ観測ナル如シ。

王省長ハ張作霖ノ狼狽言語ニ絶シ殊ニ一時ハ殆ント狂人ニ近キ位ニテ、今日ト雖モ未タ十分其常態ニ復セス、随テ重要ナル相談ヲ為ス事能ハスト如何ニモ冷笑的ニ之ヲ批評シ居レリ。

大正十四年十二月十五日大連にて

在奉外国人方面ノ張作霖ニ対スル態度

奉天ニ於ケル外国人（主トシテ英米独仏）ハ、張ニ対シ頗ル同情ヲ有シ、郭ノ反逆的行為ヲ非常ニ非難シ居レリ。張ニ同情ヲ寄スル理由ヲ問ヘハ、何レモ殆ント異口同音ニ満洲ガ支那ノ他地方ニ比シ比較的秩序維持セラレ、人民モ安堵シテ業務ニ従事シ得ルハ、全ク張ノ施政宜キヲ得タル為ナリト。依而外人方面ハ皆張カ依然其地位ヲ保タン事ヲ希望シ居レリ。而シテ其裡面ニハ最近数年間外国商人等ハ兵器売込其他東三省好景気ノ為取引亦頗ル旺盛トナリ来リタルニ、張若シ失脚スレバ是等売懸代金ノ回収困難ナルヲ虞ル、事モ其一理由トシテ含マレ居ルナラン歟。

書して玆に至り来客謂集、遂に此上筆を執るを困難となりたるに付以下天津より申上くへく候。

二　大正十四年一二月一八日発信

李景林訪問

十二月十七日李景林ヲ往訪シ、時局ニ関スル意見ヲ叩キタルニ、彼ハ年来親交ヲ辱フシ居ル貴下ニ対シ衷情ヲ吐露スヘシト前提シ大要左ノ如ク語レリ。

自分ハ張ニ対シ年来恩顧ヲ受ケタル関係アリショリ、今日迄張ノ為ニ相当尽ス所アリシモ、昨年奉直戦争後、張ハ何者（多分楊宇霆ナラント云ヒ李ハ楊ニ対シ非常ニ反感ヲ懐キ居ルモノ、如クナリシ）カノ讒言ヲ信シ、天津ニテ自分ヲ殺サントセシニ、郭ノ好意的注意ト其斡旋ニヨリ一命ヲ助ケラレタルガ、爾来張父子ニ対シテハ最早何等恩義ヲ感スル必要ナシト思ヘリ。張ノ心ハ豺狼ノ如シ到底信頼シ難キ人物ナリ。彼カ今日アリシハ、全ク部下ノ功ナリ。然ルニ今ヤ部下ノ心多ク離反ス（東三省ノ民心モ殆ント離反スト附言セリ）。張宗昌ト雖モ、彼ニ信服シ居ラス。張作相、呉俊陞等ハ張ト特殊ノ関係アルモ是トテ今日ハ張ト生死浮沈ヲ共ニスル程ノ熱心ナシ。今回郭カ張ニ対シ反旗ヲ挙ケシハ、順逆論ヨリ言ヘハ甚タ感服セサルモ、実ハ郭モ早晩自己ノ地位ガ危地ニ陥ル運命ニ在リシ。以テ彼今回ノ挙事ハ、彼自身ノ立場ヨリ言ヘハ已ムヲ得スト言ヒ得ルナラ

ン。何レニシテモ自分ハ郭ト義兄弟ノ間柄ナルノミナラス、曾テ郭ニ一命ヲ救ハレタル関係モアリ、段執政ノ命令ナキ限リ郭ヲ討伐スル意思毫モナシ。自分今日ノ地位ハ中央政府ニ対シ張作霖ト対等ナリ。随テ張ノ命令ニ服従スル義務ナシ。故ニ自分ハ飽迄保境安民ヲ第一要義トシ、尚モ此主義ヲ破壊スルモノハ何人ト雖モ極力之ヲ排斥スベシ。郭ニシテ自分ノ勢力範囲ヲ犯カサザル限リ、自分モ郭ノ背後ヲ衝ク心ナシ。実状ヲ言ヘハ、目下ノ処自カラ顧ミル尚遑アラス。随テ郭ノ背後ヲ衝クノ余裕ナシ。故ニ張郭ノ戦ハ全然其成行ニ一任スル決心ナリ。但シ張若シ失脚スレバ、自分ハ張父子ノ生命財産ノ安全ヲ計ル事ニ充分尽力シ、郭若シ失敗スレバ、郭ニ相当ノ資金ヲ与ヘ一時海外漫遊ヲ勧告スル積ナリ。尚馮玉祥ハ労農露国トノ関係頗ル密接ナルヲ以テ、彼ノ勢力拡大セラル、ハ支那ニ取リ由々シキ一大事ナリ。極力之ヲ排斥セサルヘカラス。今ヤ彼ハ自分ノ主張スル保境安民主義ヲ破壊セントス。是自分カ猛然起ツテ彼ト戦フニ至リシ所以ナリ。兵数ニ於テ彼ニ及ハス中々苦戦ナルモ、今日迄ノ交戦ハ皆我ニ優利ナリ。張宗昌ノ援軍陸続来リツ、アルヲ以テ、今後ノ形勢ハ余リ悲観スルニ及ハス云々。

李ノ口吻ニヨリ察スルニ、今回彼カ遽カニ馮軍ト戦フニ至リシハ、張作霖援助ノ意味ニ非ス、全ク馮カ彼ノ地位ヲ奪ハントスルヲ畏レタル為ニテ（李ハ郭モ直隷督弁ヲ狙ラヒ居ル事ヲ附言セリ）自己ノ地盤擁護ニ外ナラス。

張作霖私財ヲ鉄道附属地ニ運搬ス　（内容省略）

船津辰一郎前奉天総領事より出淵外務次官宛満洲・中国出張現地報告書抄

三　大正十四年一二月一九日発信

昨十八日来曹汝霖、陸宗輿、張弧、辺守靖（辺ハ元直隷省議会議長）、董顕光（董ハ Millerd Review ノ京津特派員）等数人ヲ訪ヒ、時局ニ関スル意見ヲ尋ネタル処、其言フ所大同小異、就中辺守靖（李景林ト関係頗ル密接ナリ）ノ意見最モ真相ニ近キカ如ク見受ケラレタリ。今是等諸人ノ説ヲ綜合シテ左ニ其大要ヲ摘録ス。

馮玉祥ハ最初李景林ニ向テ、大名保定ヲ国民軍ニ引渡サレタシ若シ、之ニ応スル能ハサレバ天津ヲ国民軍ニ引渡シ、大名保定ニ移駐サレタシ、ト要求シタルヲ以テ（是ハ郭松齢モ同意見）、李ハ不得已大名保定ヲ引渡ス事トシタルモ、其後馮玉祥側ニ於テハ矢張リ李ヲ直隷以外ニ追出ス計画ヲ進メ、郭松齢トモ聯絡ヲ取リ李ニ対スル圧迫態露骨トナリタルヲ以テ、李ハ袖手自滅ヲ待タンヨリハ寧ロ乾坤一擲、馮ト戦ヒ幸ニ勝テハ自カラ救フ事ヲ得ヘシトノ見地ヨリ、今回ノ挙ニ出テタルモノナリ。今ヤ李ハ張宗昌ト聯絡ヲ取リ、山東援軍モ不遠来着スルナラン、随テ形勢ハ漸次良好トナリツ、アルモ、兵数ニ於テ遙カニ馮軍ニ及ハサルヲ以テ今後如何ニ成行クヤ全然不明ナリ。

尚李景林ト張作霖トノ関係ハ、張ガ曾テ李ヲ殺サントセシ行懸モアリ、李ハ決シテ張ノ危急ヲ救ハントスル好意ナシ。左リトテ郭ノ如ク積極的ニ張ヲ倒サントスル迄ノ意見モナシ。而シテ今日ハ死物狂ニテ馮軍ニ対抗中ナリ。且ツ武器ト戦費モ欠乏シ居ルヨリ、恰モ漏

ルモノハ藁ヲモ摑ムガ如ク、張作霖ニ向テモ目下物質的援助ヲ求メツヽアリ。張作霖ヨリ言ヘハ、此際李ガ馮軍ト戦フハ仮令張ニ対スル好意的援助ノ意味ニ非ストスルモ、馮軍ヲ牽制シテ郭軍ヲ援助スル能ハサラシムル以上、其結果ニ於テ張ヲ援助スルト同シキ事故、張モ力ノ及フ限リ李ニ対シ物質的援助ヲ辞セサルベシ云々。

馮玉祥ノ赤化云々ニ関シテハ、外間ニテ馮一タヒ満洲ノ実権ヲ握ルニ至ラハ満洲ハ全然赤化スベシト憂慮スル向アル由ナルモ、右ハ聊カ杞憂ニ近シト思フ。然シ労農政府ハ従来ノ行懸ヲ利用シテ赤化運動ヲ為ス事疑ヒナシ。故ニ出来得ルナラバ可成馮ヲシテ成功セシメサル事肝要ナリ。郭松齢ノ赤化云々全然信スルニ足ラス。随テ意ニ介スルニ足ラス。然レトモ日本ニ取リテハ郭ヲシテ満洲ノ覇権ヲ握ラシムルヨリ、矢張リ張作霖ヲ充分困シメタル後引続キ其地位ヲ保タシムル事却テ利益ナルベシ云々。

附記、前記数人ノ内陸宗輿ダケハ馮ノ赤化ヲ大ニ心配シ、此際満洲ニテ張作霖ヲ援助スルト同様此地ニテモ李景林ヲ援助サレテハ如何ト云ヒシニ付、小官ハ日本ハ決シテ張作霖ヲ援助シ居ラズ、我政府ノ方針ハ絶対不干渉ナリ、随テ李ヲ物質的援助スル如キ事ハ断シテ出来スト答ヘ置ケリ。

大正十四年十二月十九日天津にて　船津生

四　大正十四年一二月一九日発信

謹啓益御清祥奉賀候。陳ハ大連ニテ書き残したる分及当地着後の見聞様別紙の通り供貴覧候。其中極秘の分ハ絶対老台限りの御含にとめ置き下され度願上候。

京津間の交通今日の模様にては何日回復出来るや相分り不申閉口罷在候。之が為、小生の旅程に非常のくるひを生じ、予定の旅行を終了し得るやを懸念罷在候。議会開会迄に是非帰朝の必要あるや否、御回示下され度願上候。小生の希望は予定の日数を超過しても予定の旅行を終了し度存居り先は右要事迄

船津生

出淵老台

極秘

今里代議士ノ来津

今里代議士ハ過日奉天ニ来リ（今里ハ町野顧問ト親交アル由）、去ル十五日大連ヨリ小官ト同船ニテ天津ニ来リシモ、北京天津間交通杜絶シ、何日ニナレハ北京ヘ行ク事出来ルカ一寸不明ナルヲ以テ、十八日空シク奉天ニ引返セリ。今里ノ運動ニ基ツクヤ否ヤ其辺不明ナルモ、仄聞スル所ニヨレバ、李景林ハ親筆ニテ張作霖ニ軍資金及武器ノ援助ヲ依頼スルノ書面ヲ今里ニ托シタル由、而シテ小泉司令官モ中間ニ在リテ斡旋ノ労ヲ取リタル由、尚関東長官及白川司令官方面ニ向テモ右軍費及武器ノ輸送上便宜供与方ヲ依頼シタル由、未ダ小泉氏ニ直接之ヲ確ムル機会ナキモ、不取敢報告ス。尚満洲ニテモ白川、児玉両氏等ハ表面厳正中立ヲ標榜シ居ルモ、其実援張的手加減ヲ加ヘ居ルニ非スヤト噂サスルモノアリ。吉田総領事ノ如キモ王永江ノ便宜ヲ計ル結果、矢張リ援張ト同様ノ結果ニナル傾アリト

ノ評アリ。

当地小泉司令官ノ如キモ、矢張リ李景林ニ同情アル如キ様子ナリトノ噂アリ。其為メカ否ヤ知ラネドモ今朝デイリーメイル社長「フィッシャー」来訪シ、京津間軍用車ヲ強制的ニ往復セシムル事ニ各国軍司令官何レモ賛成ナルモ、日本軍司令官ノミ独リ之ニ賛成セサル由（京津間交通杜絶ハ確カニ李軍ニ有利ナル如シ）、事実如何ト尋ネタルニ付、小官ハ此ノ如キ「アブサード」ノ事ハ断シテアルヘキ筈ナシ、右ハ何者カノ悪宣伝ニ外ナラスト答ヘ置ケリ。尚小泉司令官ニ確メタル処事実ハ全然反対ニテ、軍用汽車強制的来往ハ小泉司令官之ヲ主張シ、米国軍司令官之ニ反対シタル由ナリ。

五　大正十五年一月一日発信

船律ハ去月廿五日当地着以来段祺瑞ヲ始メトシ許世英、王正廷、黄郛、楊庶堪、張耀曾、蔡廷幹、張嘉璈等其他幾多ノ朝野名士及新聞記者等二拾余名（何レモ旧知）ヲ歴訪シ時局問題及赤化問題等ニ関シ意見ヲ叩キタル処、段及孫宝琦等ノ如キ少数旧式人物ヲ除ク外何レモ殆ント異口同音ニ白川司令官警告ノ結果、㈠営口ニ於ケル郭軍入市阻止、㈡二十支里ノ制限、㈢満洲ノ出兵、㈣其他奉天側ニ有利ニシテ郭軍乃至国民軍ニ不利ナル在満日本側ノ措置（主トシテ軍事当局者及満鉄ヲ指摘セリ）等ヲ攻撃シ、就中王正廷、黄郛、許世英、袁良并ニ有力ナル新聞記者等最モ熱烈ニシテ袁良ノ如キハ順天時報カ郭軍ニ有利ナル記事ハ何処ニアルヤ分ラヌ様ニ掲載シ、之ニ反シ張側ニ有利ナル報導ハ大活字ヲ以テ誇大ニ掲載スルナド兎角張作霖ニ偏スル傾向アリト随分微細ナル点迄指摘シテ非難シタル由、右ニ対シ船津ハ幸ヒ満洲ニ於ケル最近ノ実況ヲ視察シテ来リシ関係上、極メテ詳細ニ渉リ其実況ヲ説明シ、㈠ニ対シテハ単ニ郭軍ノ入市ヲ阻止シタルノミナラス、曾テ同地ニ駐屯セシ奉天軍ノ帰還ヲモ拒絶シタル事実ヲ述ヘ、㈡ニ対シテハ在満日本人約二十万、満鉄延長六百余哩ノ長サニ達シ其沿線ニ於ケル投資額約十数億ニ上リ万一ノ場合到底四五千ノ兵ヲ以テ（支那人ハ満洲ニ一個師団即約一万ノ兵アリト信スルモノ多シ）充分ナル保護ヲ為ス事不可能ナル所以ヲ説明シ、又順天ノ態度如何ハ知ラサルモ、在満邦人ノ多数ハ張作霖ニ反対シ殊ニ奉天ニ於ケル日本人経営ノ新聞ハ何レモ猛烈ニ張作霖ニ不利ナル記事ヲ掲載セル事ヲ附言シ、尚日本政府ハ屢次声明セル通リ飽迄厳正中立不偏不党ノ政策ヲ実行スル決心ニテ、出先官憲モ勿論其趣旨ヲ遵奉シ居ル筈ナルモ、万人環境ニ支配セラレ、聊カニテモ支那側ノ誤解ヲ招ク如キ言動無之様此際更ニ注意ヲ喚起スル為、特ニ船津ヲ奉天及天津其他各地ニ急派セシメタル次第ヲ詳細説明シタル処、此点ニ対シ何レモ諒解スル所アリタルモノヽ如ク、殊ニ許世英、黄郛等ハ日本政府ノ用意周到且懇切ナルヲ感服セル模様ニテ、今後若シ排日ノ風潮各地ニ起ル如キ事アリテモ、許及黄等ハ其緩和方ニ相当尽力スル如キ口吻ヲ漏シタル趣ナリ。

十二月卅日楊庶堪（司法総長）談話中ノ一節

○許世英内閣カ今日迄其成立遅々タルハ黄郛、王正廷等カ反対セル為ナリ。彼等ハ摂政内閣ノ復活ヲ計画シ居リシモ、第二軍即岳維峻

一派ノ反対ヲ受ケ是亦実現不可能トナリ、結局許内閣ハ曲リナリニ成立ヲ見ルベシ。

○司法権回復ニ対シテモ、関税会議同様日本ノ同情アル援助ヲ希望ス。即無条件ニテ主義上支那ノ希望ヲ容レラレン事ヲ望ム。但シ支那ノ司法制度現今ノ如キ状態ナル以上、或種ノ保障ヲ外国ニ与フル事已ムヲ得サルヘシ。仮令ヘハ支那ノ司法機関ニ外国ノ顧問ヲ置キ或ハ外国ノ弁護士ヲ許ス如キ筈ナリ云々。

六　大正十五年一月一一日発信

一月六日夜漢口着、同十日夜出発下江、滞在中呉佩孚ヲ始メトシ蕭耀南、斎燮元、張志潭、孫潤宇、杜錫鈞（鎮守使）、陳介（交渉員）、呉景濂、張百烈、張其鍠（呉佩孚秘書長）、江天鐸（元農商次長）、王献煒（元交通次長）等ト会見、時局ニ関スル彼等ノ意見ヲ叩キ之ヲ綜合シテ其要点ヲ摘記スレバ左ノ如シ

呉佩孚ハ最初張志潭等ノ慫慂ニ応シ、張作霖討伐ヲ標榜シテ岳州ヨリ当地ニ来リシモ、右ハ孫伝芳ノ旗挙ゲニ策応センカ為ナリシニ過キス。爾来政局ノ変化ト共ニ漸次其政策ヲ変更シ、今ヤ馮玉祥ヲ政敵ノ目標トシ赤化防止ヲ加味シ、張作霖ト聯絡ヲ執ル事ニ腐心シ居ルモノ、如シ。張作霖ノ代表張景恵不日（十日若クハ十一日頃）来漢ノ筈ナレバ、同人着ノ上ハ張作霖ノ意向モ分明スベク、随テ今後ノ対策モ稍具体的ニ計画スル事ヲ得ベシトノ事ナリ。張志潭ヤ斎燮元ノ説ニヨレバ湖北ハ勿論呉ノ指揮ニ服シ湖南ノ趙恒惕、江西ノ方本仁、南京ノ孫伝芳等モ呉ト行動ヲ共ニスル筈ナレバ、目下呉ノ代表トシテ南京ニ派遣シアル参謀長蔣方震ノ不日帰漢スルヲ待チ中央政府ニ対スル方策等ヲモ協議スル積ナリ。又張作霖ノ東三省ニ引籠リテ関内ニ進出セサル限リ呉張ノ提携ハ充分可能性アリト頗ル楽観的意見ヲ懐キ居ルモノ、如クナリシ。要スルニ呉ハ今日ノ処、自分ノ独力ニテ時局ニ対スル具体的方策ヲ立テ着々之ヲ遂行スル丈ケノ実力ナク、大体ハ時局ノ推移ヲ見、臨機応変ノ策ヲ施ス方針ナル如ク察セラル。

或ル一部ニテハ（陳介氏ノ如キ）、呉ノ実力ヲ軽視スルモノ尠カラス。其理由トスル処、目下湖北ニ在ル軍隊約十余万ト雖モ其中呉ノ手兵二千余名ト外ニ一ヶ師団位ニ止リ、其他ハ蕭耀南ノ直属部隊ナリ。寧ロ蕭ノ指揮ニ服スルモ呉ノ命令ニ応スル事ナカルベシ。殊ニ湖北ノ軍隊ハ日下特別税即阿片税年額約二千万元ノ収入ニテ維持シ居レリ。此税金ハ蕭耀南部下ノ軍隊幹部ニテ其収支ヲ掌リ居リ、近来湖北軍隊ノ将校ハ何レモ裕福ニテ飽食暖衣ノ有様ナリ。随テ此地ヲ離レテ遠征スルヲ欲セサルハ当然ナリ。現ニ将校中其所管軍隊ハ遠隔ナル或ル地点ニ駐屯セシモ、将校自身ハ漢ロノ自宅ニ優游自適ニ居ルモノ尠カラスト。馮玉祥軍隊ノ如キ三四ヶ月以上ヲ給料未払ナルモ、湖北ノ軍隊ハ毎月間違ナク給料ヲ支給シ居レル由ナリ。過般呉佩孚カ一部軍隊ノ出征ヲ命セントセシ所、所謂出征軍費ナルモノハ呉ニ於テ工面セサルヲ得サル関係上漢ロ各銀行団ニ二百余万弗ノ強制的借款ヲ為シタル由、此点ヨリ察スル所ハ呉佩孚側ノ言ノ如ク湖北軍隊ハ呉ノ思フ儘ニ動クトハ思ハレサル如シ、然シ蕭耀南ハ小官ニ向テ（当時張志潭小官ノ傍ニ在リ）自分ハ飽迄呉佩孚将軍ト

行動ヲ共ニスル覚悟ナリ。又湖北ハ目下全然呉将軍ノ指揮命令下ニ在ル旨ヲ繰返セリ。想フニ是ハ多分外間ニテ呉、蕭ノ間表面結合スル如ク見ユトモ内実否ラストノ噂アルヲ以テ、故サラニ之ヲ打消サンカ為ニ右ノ如キ言ヲ為シタルニ非スヤト疑ハル。何レニシテモ湖北ニ於ケル呉ノ勢力ハ、表面蕭燮元及蕭耀南ヲモ傘下ニ包擁(ママ)シテ指揮スル如キ観アルモ、蕭ノ如キ曾テ南京ニ在リシ当時呉トハ対等ノ地位ニ立チテ相下ラサリシハ人ノ知ル処、今日彼カ副司令トシテ呉ノ下風ニ甘ンスルハ外部ノ政敵ニ対スル関係上相互ニ聯絡シ居ルニ過キス。

北京ニテ袁良ノ語リタル所ニヨレバ、孫伝芳ハ既ニ江蘇、浙江、福建、江西、安徽ノ五省ヲ自分ノ勢力範囲トナシ、儼然其盟主ヲ以テ自カラ任シ居ルヲ以テ呉佩孚ト余リ密接ナル聯絡ヲ取ル事ヲ好マス。蓋シ呉ニ聯絡スレバ過去ノ経歴其他ノ関係上、五省盟主ノ地位ヲ呉ニ奪ハル、虞アルヲ以テナリト。呉モ此情勢ヲ看破シタルヲ以テ、此際寧ロ孫ヲ除クニ如カスト考ヘ刺客ヲ派シテ孫ヲ殺害セントセシニ右刺客ハ事前ニ発覚処刑セラレタリ。爾来呉、孫ノ関係益不良トナリタリトノ事ナリシ故、右ハ或ハ馮玉祥側ノ孫、呉離間策トシテ散布セル謬言ナルヤモ計リ難キヲ以テ、其真偽如何ヲ陳介ニ尋ネタルニ陳モ又同様ノ噂ヲ聞込ミタルモ未タ其真偽ヲ確ムル能ハスト答ヘタリ。

大正十五年一月十一日夜大福丸船中にて認ム

七　大正十五年一月一一日発信　（新年挨拶省略）

八　大正十五年一月二四日発信

一月十二日南京ニ於テ孫伝芳、江蘇省長陳陶遺、張孝若（張謇ノ長男、当時孫ト打合ノ為南京ニ出張中ナリシ）謝交渉員、孫ノ副官長張世銘、孫ノ参謀長劉崇紀等ト会談、同十三日ヨリ十六日迄上海ニ於テ唐紹儀、葉恭綽、鄭洪年、岑春煊、温宗堯、呉鍾麟、王桂林、陳光甫（陳ハ上海商業銀行総理ニテ実業界ニ勢力アルモノ）、殷汝驪、史量才、胡適、鄭貞文、ソコルスキー（ファー・イースタン・レヴュウ記者）、ノース・チャイナ・デイリーニュウス社長、上海タイムス社長等ヲ歴訪シ時局問題ニ関スル意見ヲ叩キタリ。其主モナル左ノ通リ。(ママ)

孫伝芳曰ク、予ガ客冬突如事ヲ挙ケシハ、奉天側カ表面浙江ニ於ケル予ノ地盤ヲ尊重シ決シテ侵犯セサル旨声言セルモ、楊宇霆南京着任以来ノ言動ハ全然之ニ反シ早晩浙江ヲモ侵略シ兼ネマシキ勢ナリシ故、不得已、先ンスレバ人ヲ制スル考ヨリ急遽事ヲ挙ケタル処、案外トン〳〵拍子デ順調ニ進行シ、瞬ク間ニ奉天軍ヲ山東以北ニ駆逐スル事ヲ得タリ。今日自分カ馬ヲ進メレバ張宗昌ヲ打破スルハ極メテ容易ノ業ナルモ、予ハ徒ラニ自己ノ勢力範囲ヲ拡張スル野心ナキヲ以テ、今ヤ専ハラ(ママ)江蘇、浙江両省ヲ充分整頓スル事ニ全力ヲ注キ居レリ。福建、安徽、江西モ外部ニ対シテハ行動ヲ共ニスルモ、其内政ニ至リテハ全然当局者ニ一任シ何等干渉セス（日本ノ満洲出兵其他ニ対シ非難ノ口吻ヲ漏ラシタルニ付、小官ハ詳細其実情ヲ説明シタル処、孫ハ更ニ語ヲ続ツケ(ママ)）、日本ノ内政不干渉、厳正中立、不偏不党ヲ標榜セル対支政策ハ至極感佩スル処、但シ人民ニ

対シテハ同情ヲ寄セラレタシ。即支那国民ノ合理的希望乃至要求ニ充分同情ヲ寄セラレタシ。治外法権ノ撤廃モ必要ナルガ、差当リ先ツ支那ノ治内法権ヲ尊重セラレン事ヲ望ム（彼ハ治内法権ナル新熟語ハ自分ノ発明ナリトテ左モ得意ニ左ノ如ク附言セリ）。治内法権トハ、仮令ヘハ租界内ニ逃亡隠匿スル支那ノ政治犯人ノ如キ支那政府ノ要求次第ドシ〳〵引渡サル、事トナレバ支那内乱ノ種ヲ大ニ減少スル事ヲ得ベシ云々。

右ニ対シ小官ハ、租界内ノ政治犯人引渡ハ不可能ノ事ナリ。但シ将来租界撤廃ノ暁ニハ其不便ヲ除去スル事ヲ得ヘキモ、其場合ニハ政治犯人ハ日本其他最モ接近セル外国領土ニ逃亡スル事トナリ、結局支那自身カ大ニ覚醒シテ内政ヲ改善セサル限リ、仮令租界撤廃セラル、モ支那内乱ノ種ハ絶ヘサルベシト答ヘ、重ネテ孫ハ又日支ノ関係密接相互援助ノ必要ヲ説キ、支那若シ亡フレバ日本亦亡フト如何ニモ日本ノ存立ハ支那ノ力ナル如キ口吻ヲ漏シタルニ付、小官ハ日支両国カ唇歯輔車ノ関係ニ在ル事ハ今更申ス迄モナキ処ナルモ、日本ハ支那ノ力ニ依リ始メテ存立スル如キ薄弱ナル国ニ非ス、寧ロ支那コソ日本ノ力ニテ列国ノ分割ヲ免レ居ル位ナリ、何レニシテモ我等東洋民族ハ今ニ於テ大ニ覚醒シ、互ニ相提携シテ其振興ヲ計ラサレバ他日噬臍ノ悔ヲ貽ス事アルベシト答ヘ置ケリ（筆者曰ク孫ハ今回ノ成功ヲ頗ル得意トシ聊カ慢心シ居ルモノ、如シ。支那人一般ニ於テモ此ノ如ク批評シ居レリ）

張孝若曰ク、孫伝芳ハ中々ノヤリ手ニテ家父モ感服シ居レリ。地方人民ノ気受モ亦極メテ宜シ（トテ縷々孫ノ功績ヲ述ヘテ極力之ヲ推称シ）、孫ハ目下長江下流ニ於ケル直隷派有力者（呉毓麟、高凌蔚、顧維鈞等其他）ヲ南京ニ召集シテ会議ヲ開ク事トナリ居リニ付、自分モ家父ヲ代表シテ之ニ出席シタル上更ニ溯江呉佩孚ニ面会シテ意見ヲ交換スル積ナリ云々。

ソコルスキー曰ク（Sokolsky ハ目下 Rea ニ代リテ Far Eastern Review ヲ管理シ、他面 North China Daily News ニモ筆ヲ執リ居レリ）

最モ確カナル筋ヨリ聞込ミタル処ニヨレバ、孫伝芳ハ過般親シク張謇ヲ南通州ニ訪ヒ深厚ナル敬意ヲ表シ、時局収拾（主トシテ江浙方面）ニ関シ懇々ト張ノ助力ヲ求メ、又将来機会ヲ作リ張ヲ大総統トナス事ニ尽力スル旨ヲ述ベ、又或ル実業家ノ献策ニ基ツキ上海ニ於ケル亜片ノ輸入及取引ニ依リ年額約四千万弗ノ収入ヲ得、其中弐千五百万弗ハ江蘇省ニ於ケル実業振興其他公共的事業ノ為ニ利用シ、千五百万弗ハ軍事費ニ応用セントノ計画ヲ立テ、目下着々進行中ナル由。右ハ真偽不明ナルモ、張謇ハ前年来、余リ事業ヲ拡張シ過キタル為財政上非常ナル苦境ニ陥リ、一時ハ殆ント破産ノ状態ニ瀕シタル事アリ。旁々此際孫ヲ利用シテ此頽勢ヲ挽回セント試ミ居ルニ非ルカト思料セラル。何レニシテモ孫ハ大ニ財ヲ散シテ地方紳士ノ歓心ヲ博スル事ニ努力シ、他面又一般民心ノ収攬ニ全力ヲ傾注シ居ル為ニヤ比較的人気アル方ナリ。

江蘇全省警務処長兼南京警察庁長王桂林曰ク（一月十六日）

自分ハ再応辞職ヲ願出テ未タ許可セラレサルモ断シテ帰任セサル積ナリ。孫伝芳ハ表面江蘇、浙江、安徽、江西、福建五省総司令ト称シ居ルモ、彼ノ実勢力ハ辛フシテ江蘇、浙江ヲ維持スルニ過キス。安徽督弁陳調元ハ表面孫ヲ推戴スル如キ態度ヲ取リ居ルモ、決シテ心服シ居ラス。陳ハ目下一コ師団半ノ兵ヲ擁シテ蚌埠ニ在リ。塩税収入中ヨリ月額六万弗其他鳳陽関ノ収入ヲ攫得シ居ルヲ以テ軍費ニハ左迄困リ居ラス。彼ハ極力安徽全省ヲ以テ自己ノ地盤トナス事ニ腐心シ居レリ。鄧如琢（安徽人）ハ先キニ安徽督弁ノ地位ヲ狙ラヒ、頻リニ安徽ハ安徽人ノ安徽ナリト高唱セシモ、孫伝芳カ公式ニ陳調元ヲ安徽督弁ニ任命セシヨリ、鄧ハ不得已怨ヲ呑ミテ九江ニ雌伏ノ姿ナリ（鄧モ約一コ師団半ノ兵ヲ有ス）。

浙江ニ於ケル省長夏超ノ勢力ハ相当強ク、而シテ夏ハ孫伝芳ト余リ好カラス。故ニ孫ハ夏ヲ監視スル意味ニ於テ其腹心タル孟昭月ヲ杭州ニ駐屯セシメ居タルカ、最近夏超一派ノ運動ニ基ツキ殷汝驥等其中堅トナリテ省憲法ヲ制定シ、各省自治ノ制度ヲ実行セントシ、且ツ浙江ハ浙江人ノ浙江ナリトノ主張ヲ高唱シ、浙江省ノ費用（年額約一千万弗）ヲ以テ維持シ来リシ所謂浙江軍周鳳岐ノ一師（目下南京ニ在リ）陳儀ノ一師半（目下徐州ニ在リ）ヲ浙江ニ移転セシメントノ議、浙江省内ニ起リツヽアルヨリ孫伝芳ハ急遽其直系部下タル（ママ）第二師団長盧香亭ヲ杭州ニ移駐セシメ、以テ自己ノ地盤ヲ堅ムル事トセリ。此ノ如キ状態ナルヲ以テ、孫伝芳ノ浙江ニ於ケル勢力ハ今日ノ処未タ楽観ヲ許サヾルモノアリ。兎角孫ハ今ヤ種々ノ点ニ於テ山東方面迄手ヲ延ハス余力ナク、随テ山東方面ノ事ハ張宗昌、李景林、靳雲鶚等ノ為スカ儘ニ一任シ、其成行ヲ観望スル方針ナル如シ。又孫ハ呉佩孚ニ対シ表面擁護推戴ノ態度ヲ持シ居ルモ内心ハ否ラス、殊ニ斎燮元ハ今尚機会アラハ再ヒ江蘇ヲ擁有セントノ野心アルヲ以テ孫ハ此点ニ対シ特ニ警戒シ居ル関係上、目下斎ハ行動ヲ共ニシ居ル呉佩孚ト充分ノ融和出来サルハ当然ナリ云々（筆者曰ク王ノ観察ハ最モ肯綮ニ中リ居ル如シ）。

大正十五年一月廿四日春日丸船中ニテ記ス

九　大正十五年一月二四日発信

一月十八日青島着同十九日済南ニ赴キ張宗昌、潘復（潘ハ両三日前天津ヨリ李十一ト同道来済シタル由）其他膠東護軍使兼渤海艦隊総司令畢庶澄等ト会見、畢ハ数日前泰安ニ赴キ廿一日済南ニ帰リ同夜出発小官ト同車青島ニ帰任セリ

李景林ハ前敵総司令トシテ目下泰安ニ在リ。先ツ河南方面ヨリ進入セントスル国民軍ヲ撃退シ、更ニ靳雲鶚ト話合ヲツケ、此方面ニ於ケル接衝一段落ヲ告クルヤ直チニ馬首ヲ転シ、北進シ該方面ニ於ケル国民軍ヲ圧迫シテ直隷ヲ再ヒ奪回セントスル計画ナル如シ。

張宗昌、李景林共ニ目下軍事方面ノ計画ニ没頭シ民政外交方面ハ適当ナル補佐者乏シク殊ニ軍費捻出ノ為種々無理無謀ナル行動ヲ敢テシ外国国民及地方人民ノ怨ヲ買ヒ居レリ。張ハ此方面ニ適当ナル人物ヲ得サルニ於テ、遂ニ大ナル失敗ヲ招クヤモ計リ難シ。

呉佩孚方面トハ相提携シテ国民軍ニ当ル事諒解充分成立シ居ル由ナ

リ。只斬雲鵬ハ山東人ナルヲ以テ山東ヲ略取シテ自己ノ地盤トナサントノ野心アルモ今日ノ処呉佩孚トノ関係上張宗昌ニ向テ敵対行為ヲ取ル能ハス最近双方ヨリ幾多接衝ノ結果斬ノ部下ヲ養フ丈ケノ地盤ヲ山東安徽方面ニ於テ作ル事ヲ容認スル位ノ程度ニテ折合フ事トナリタル如シ。

一〇　大正十五年一月三〇日発信

上海交渉員許沅談話大要（十五年一月十三日）

楊宇霆ノ大失策

民国十四年九月孫伝芳ノ挙事ハ如何ニモ突然ニテ、而カモ其戦禍ハ遂ニ各地ニ蔓延シ殆ント近代稀レナル大戦乱ヲ惹起スルニ至レリ。右ハ無論種々ナル遠因近因アリシハ申ス迄モナキ処ナルカ、就中最モ直接ノ動機トナリシハ楊宇霆ノ無謀軽卒ナル言動ニ基ツクモノ多シ。曩ニ奉天側ハ飽迄孫伝芳ノ地盤ヲ尊重シ、決シテ之ヲ侵犯セサル事ヲ声明セシニ拘ハラス、又楊カ南京ニ赴任スルヤ僅カニ二百ノ護衛兵ヲ率ヒタルニ過キス、以テ孫ニ対シ飽迄他意ナキヲ示シタルニ拘ハラス、楊ハ着任後ロヲ極メテ江蘇ニ於ケル諸般ノ施設実ニ拙劣且ツ腐敗セルヲ罵倒シ、自分ヲシテ江蘇ニ在ル半年ナラシメハ大ニ治績ヲ挙ゲ、南満洲ト大差ナキニ至ラシムベシト揚言シ、着任早々諸般ノ変革ヲ行ヒ、遂ニ在来軍隊ノ士官ヲモ更迭セシメントスルニ至レリ。左ナキダニ文武官共ニ大ニ不安疑惧ノ念ヲ懐キ居リシ際ナレバ、陳調元等ハ若シ此勢ヲ以テ推移セハ江蘇省在来ノ軍隊ヲ遂ニ解散スルニ至ルヘシト信シ、同時ニ孫伝芳モ此辺ノ消息ヲ聞知シ、此模様ナレバ浙江モ遠カラス侵サルルハ疑ナシト考ヘ、玆ニ江浙相呼応シテ楊宇霆ヲ排斥スル事トナリ、遂ニ今回ノ如キ事変ヲ惹起シ楊モ周章狼狽シテ奉天ニ逃ケ帰リタル次第ナリ。左レバ昨年大動乱ノ導火線ハ確カニ楊宇霆ノ責ニ帰セサルヲ得ス云々（江蘇省現下ノ政局ニ関スル許ノ観察ハ既報王桂林ノ談ト大差ナシ）

反基督教風潮

昨年五月卅日事件発生後、支那人ノ外国人ニ対スル反感著ルシク高調（ママ）シ、遂ニ外国人経営ノ教育事業迄ニ影響スルニ至レリ。上海ニ於ケル約翰大学（St. John's University）ハ西暦一千八百七十九年創立セラレ約半世紀ノ歴史ヲ有シ幾多ノ人材ヲ出シテ（顔恵慶、顧維鈞、施肇基、黄炎培、余日章ノ如キ）支那ニ於ケル外人経営ノ学校中最モ出色ノ大学ナリシ。然ルニ昨年五卅事件ニ関聯シ排外運動起ルヤ本校学生亦之ニ参加シ、同年六月、五卅事件犠牲者追悼会挙行ノ際支那国旗ノ半旗掲揚ヲ行ハントスルヤ、大学当局ノ拒絶スル所トナリ、学生等ハ大ニ激昂シ、遂ニ退学ヲ為スモノ続出シ、千余人ノ学生中約九割ハ退学シ、左シモ盛大ナリシ大学ハ殆ント瞬間ニシテ消滅ニ瀕セル状態トナレリ。校長「ポット」氏ハ本年六十二才ノ老人ニシテ、殆ント該大学ノ創立者同様ナレバ、本校ニ対スル愛着ノ念亦更ニ一層深キモノアリ。初メ学生ノ意気込中々猛烈ナリシヨリ、半旗ノ掲揚ヲ承諾セシニ神学部ノ主任者断固トシテ之ニ反対シ、許可セサルノミナラス、一旦掲揚シタルモノヲ引卸シタルヨリ遂ニ此ノ如キ事態ヲ醸生セシモノニテ、校長ポット氏ノ当時痛心遺ル瀬ナキ状態ハ実ニ見ルニ忍ヒサルモノアリシ。自分（許氏）ノ長男モ該

大学ニ在リ、然モ本年卒業スル筈ナリシニ付、自分ハ極力之ヲ説諭シ此ノ如キ軽挙妄動ニ加担スヘカラスト厳命セシモ、彼自身何々部ノ委員長トカ称シ最モ猛烈ニ活動セシ一人ナリシ。今日ノ支那学生ハ、教師ノ訓誡モ両親ノ意見モ到底耳ニ入ラス、実ニ困ッタモノナリ。次男モ是迄某中学ニ通学セシメ居リタルモ、此ノ如キ弊風ニ感染スル危険ヲ感シタルニ付、早速通学ヲ中止シ、目下自宅ニテ漢、英、数学等ヲ教授シ居レリ。尚約翰大学ノ退学生等ハ新ラタニ光華大学ナルモノヲ仏租界ニ創立シ、之ニ他ノ基督教関係ノ各学校ヨリ退学セル学生ヲ収容シ、目下約千二三百ヲ有スル儼然タル一大学トナリタル由。聞ク所ニヨレバ、南京ノ金陵大学学生モ最近約二百五十人許リ退学シ、東南大学ニ転学シ、蘇州ニ於ケル東呉大学ニテモ近来頗似ノ紛擾発生シ居ル由。想フニ基督教ニ反対スルト云ハンヨリ、寧ロ外国人ニ対スル反感ガ惹テ外国宣教師ノ関係スル学校ヲモ嫌悪スルニ至リタルモノト見ル方妥当ナル如シ云々。

一一　大正十五年一月三〇日発信

在別府靳雲鵬氏談（一月廿六日）

去ル十三日呉佩孚ノ参謀長孫方震亀川ニ来リ、十五日迄滞在シ懇談ヲ遂ケタリ。孫ハ立派ナル人物ナリ。相当識見ヲ有シ、又真ニ国家ヲ憂フルノ士ナリ。然ルニ支那現下ノ政局ヲ見ルニ、群雄各地ニ割拠シテ各自皆利己的ノ行動ヲ為シ、当分殆ント手ノ下シ様ナキ状態ナルニ憤慨且ツ失望シ、一時政界ヨリ離脱セント欲シ、上海ヨリ呉佩孚ニ対シ辞職ヲ申出タル由ナルヲ以テ、自分（靳）ハ大ニ其不心得ヲ諭シ、此際国家ヲ前提トシ私情ヲ棄テ、人物本位ノ団結ヲ計ル事必要ナレバ、現在支那ニ於テ一方ニ覇ヲ称ヘ居ル張作霖、呉佩孚、孫伝芳等ヲ糾合シテ支那ノ統一ヲ計ル事ニ尽力スヘキヲ説キタル処、彼モ決心ヲ翻カヘシ、更ニ大連ニ赴キ楊宇霆ヲ大連ニ招キ該地ニテ篤ト意見ヲ交換シタル処、双方ノ意思能ク疎通融合シタル旨ノ来電アリタリ。自分モ不日一応東京ニ赴キ、日本当局者ト会見シタル後、時宜ニ依リ奉天、天津其他ノ地方ヲモ一巡シ視察ヲ遂クル希望ナルガ、今後ノ行動ハ奉天ニ至リタル上ニテ決定スル積ナリ云々。

備考　孫方震カ大連ヨリ上海ニ赴ク途中去ル廿二日青島ニ立寄リタル際、張宗昌、潘復ノ命ヲ銜ミ特ニ青島ニ出張シ来リタル李十一ガ孫ニ面会シ辞職ノ真否ヲ訊ネタル処、孫ハ事実ナリト答ヘ、尚ホ目下孫ハ巨頭連ノ合縦連衡ヲ策シ居ルモ、右ハ万一不成功ノ場合或ハ果ヲ呉ニ及ホス虞アルニ付表面呉ト関係ヲ絶チタル如クスル為辞職ヲ申出タルニ過キスト答ヘタル由、何レカ真ナルヤ不明ナルモ参考迄右附記ス。

大正十五年一月卅日

一二　大正十五年一月三一日発信

支那政界ノ現状

支那政局ノ分野

支那政局現下ノ分野ハ張作霖ノ東三省、馮玉祥一派ノ直隷及西北一帯、呉佩孚ノ長江上流域一帯、孫伝芳ノ長江下流域、張宗昌、李景林ノ山東一帯等ニ大別スルヲ得ヘシ（南支及雲貴方面ハ小康ノ姿ナ

ルヲ以テ別問題トシテ除外ス）。

東三省即東北一帯……ハ当分三年前即張作霖独立時代ノ状況ニ復帰スルナラン、張作霖ハ東三省ニ於テ特種ノ関係ヲ有シ、殊ニ張作相、呉俊陞等トハ特別ノ因縁アリ。随テ之ヲ押フル力充分ナルヲ以テ之ヲ他ノ各地ニ比スレバ東三省ハ対内対外共ニ比較的統一セル集団タルヲ失ハス。此点ハ張ガ呉佩孚ヤ孫伝芳ニ比シ大ニ強味アル所ナリトス。但シ是一歩東三省ヲ出ツレバ張作霖ノ名声ハ甚タ面白カラス、殊ニ長江一帯、就中上海方面ニ於ケル張ノ人望ハ殆ント零ナリ。故ニ張カ若シ昨年ノ如ク中央政界ニ向テ干渉ガマシキ態度ニ出ツル如キ事アラハ彼ハ再ヒ支那国民ノ非常ナル反対ヲ受クルニ至ルベシ。之ニ反シ彼カ関外ノ地域ニ満足シ、東三省内部ノ改善整理ニ全力ヲ注ガバ彼ハ依然トシテ当分東三省首脳者ノ地位ヲ保持スル事ヲ得ベシ。若シ彼ガ更ニ進ンテ政権ヲ其子学良ニ譲ル事トモナラバ、一層好結果ヲ齎ラスナラン。

西北一帯……ハ目下馮玉祥一派即国民軍ノ勢力範囲ナリ。将来如何ニ変化スルヤ予測出来サルモ、当分ハ此形勢ヲ持続スルナラン。然シ国民軍ハ第一、第二、第三、共ニ融合一致シ居ルヤト言フニ頗ル疑問ナリ。今回李景林トノ戦争ニ最モ奮闘努力セシハ、第一軍即張之江軍ナリ。然ルニ李ヲ駆逐シタル後、左ツタル功労ナカリシ、第三軍々長孫岳、直隷督弁ニ任命セラレタルヲ以テ、張之江ヤ李鳴鐘ハ心中不満ヲ懐キ居ル由随テ今後山東方面ヨリ張宗昌、李景林等カ再ヒ直隷ヲ攻撃スル場合、張之江等ハ多分袖手傍観ノ態度ニ出ツベク、而シテ孫岳若シ失敗セバ、張ハ之ニ代ハラントスル下心アリト伝ヘラル、国民軍ノ領袖馮玉祥ハ、既ニ嘱サル、通リ部下ノ内訌ト、加フルニ徐樹錚暗殺以来、世人ノ非難攻撃漸ク高ク（馮ヲ背景トスル一部政治家及新聞記者ヲ除ク外、各地方ニ於ケル馮ニ対スル評判ハ甚タ悪シク殆ント異口同音ニ其人格劣等ナル一大偽善家ナリトノ説ニ一致スルモノヽ如シ。殊ニ呉佩孚ノ如キ最モ強ク彼ヲ罵倒シ呉ト馮トハ氷炭相容レサル間柄ナルハ一見看取スル事ヲ得ヘシ）馮モ此辺ノ消息ヲ察知シ、急遽下野ヲ声明シタル次第ナルベシ。事情前陳ノ如クナルヲ以テ国民軍一派ノ結束亦強固ナリト云フヘカラス。随テ直隷山東方面ニ於ケル形勢ハ今後如何ニ変化スルヤ予測シ難シ。

長江上下流域……呉佩孚ハ目下漢口ニ在リテ湖北ヲ踏台トシ湖南、河南、四川等ノ各地ニ向テ勢力ヲ拡張シ、更ニ進ンテ孫伝芳ヲモ其傘下ニ立タシメントノ意図ヲ有シ居ル如ク、而シテ其名声ハ各地到処極メテ良好ナルモ其実際ハ其実力乏シク只空名ヲ擁スルニ過キサル如キ観アリ。即其膝下ニ在ル湖北督弁蕭耀南サヘ表面ハ呉ニ対シ飽迄服従ノ態度ヲ粧ヒ居ルモ、其内心ハ大ニ然ラス。殊ニ孫伝芳ノ如キ呉ニ対シテハ敬遠主義ヲ取リ居レリ。而シテ孫伝芳亦五省総司令トシテ南京ニ蟠居シ江蘇、浙江、安徽、江西迄号令セントスル野心アルモ右各地ニ割拠スル陳儀、陳調元、方本仁、鄧宝珊、夏超、白宝山等亦各自其目的野心アリテ是亦一致セス之ヲ要スルニ支那目下ノ政局ハ呉佩孚、孫伝芳、張作霖、張宗昌即長江一帯ヨリ山東ヲ中間ニシテ東三省ニ連ナリ、合縦連衡以テ馮玉祥ヲ首脳トスル国民軍ニ当ラントスル形勢ナルモ、更ニ之ヲ詳細ニ解剖スレバ裡面ノ関

係甚タ複雑調ル同床異夢ノ一語最モ適切ニ支那政界ニ於ケル各巨頭連ノ心理ヲ物語ルモノニテ、支那ノ政局ハ当分混沌タルヲ免レサルベシ。

附記　北京政府即中央政府ハ今ヤ国内ニ向テ何等権力ナク、僅カニ国民軍ヲ背景トシテ単ニ外交事務ヲ取扱フ為、依然其形骸ヲ存続スルニ過キサルヤノ観アリ。倫敦タイムス特派員「フレーザー」曰ク、北京政府カ命脈ヲ保ツハ全ク各国公使館ガ北京ニ存在スルガ為ナリ。北京ヨリ各国公使館ヲ撤去スレバ所謂ル中央政府ナルモノハ有名無実ニテ北京ノ外交部ハ各省ノ交渉署ト何等異ナル所ナカルベシト。

一三　大正十五年二月三日発信

支那ニ於ケル赤化問題

赤化問題ニ関シ甲乙二様ノ議論アリ。甲ハ支那ハ赤化スル虞アルニ付、今ニ於テ極力之ヲ防圧セサルベカラストノ説ト、乙ハ支那ハ風俗習慣其他ノ関係上到底赤化スル能ハサルベシトノ説是ナリ。今其理由トスル処ヲ述フレバ大要左ノ如シ。

甲説　労農露国ハ北京、天津、上海、漢口、広東等支那ノ各主要地ニ有力ナル機関部ヲ置キ、年々数百万弗ヲ散シ、極力各方面ニ向テ赤化運動ヲ行ヘリ（シムプソン氏カ小田切氏ニ語リタル所ニヨレバ、北京ニ於ケル支那学生中露国側ヨリ毎月廿弗内外ヲ支給セラレ赤化運動ニ従事スルモノ常ニ約百五六十名アリ。其他各地ニモ同様ノ学生相当之アルトノ事ナリ）。各地ニ於ケル学生運動及労働者ノ同盟罷工等ハ即其結果ナリ。又広東政府ハ今ヤ殆ント赤化シ馮玉祥直轄ノ下ニ在ル張家口ノ如キモ諸般ノ施設悉ク労農露国ヲ模倣セルモノナリ。若シ此儘ニ放任セバ支那ハ各地共漸次赤化シ、労資争議ノ如キ紛擾ハ絶フル時ナカラン云々。此説ハ最モ盛ンニ東三省ニ唱ヘラレ、張作霖ノ如キ尚モ日本知名ノ士ヲ見レバ必ス之ヲ繰返シ、赤化防止及馮派圧迫ヲ以テ支那ニ忠ナルト同時ニ大ニ日本ノ為ニ功徳ヲ施スモノト考ヘ居ルモノ、如シ。此点ハ張宗昌ノ如キ、李景林ノ如キ（或ハ張作霖ト打合済ナルヤモ計リ難シ）矢張リ同様ニシテ、小官ニ向テモ熱心ニ赤化防止ノ決心ヲ語リ、日本ハ之ニ対シ大ニ同情シ居ルナラントノ口吻ヲ漏ラセリ。又天津方面ニテ李景林ハ曾テ苛歛誅求ノ結果、大ニ地方人民ノ怨ヲ買ヒシニ拘ハラス客軍国民軍ト戦端ヲ開クヤ地方人民多ク李軍ニ同情シ其戦勝ヲ希望セルハ赤化セル馮玉祥勢力ノ侵入ヲ恐レタルカ為ナリシト云フ。

乙説　支那ハ風俗習慣共ニ露国ト異ナリ、到底赤化スル能ハス、殊ニ支那ノ家族制度ハ同族相扶助シテ或程度マデ共産主義ヲ実行シ居ルヲ以テ、露国式ノ共産主義ヲ行フ必要ナカルベシ。然シ労農露国ガ極力支那ニ向テ赤化宣伝ヲ行ヒツヽアルハ事実ナリ。随テ其運動ヲ継続スル間ハ或程度迄赤化的色彩ヲ帯フル運動行ハルヽ事アルヘキモ、之ヲ以テ直チニ支那赤化セリト為スハ謬想ナリ。馮玉祥ハ支那ハ内政的ニ赤化スル如キ事ナシト確信スルモ、対外的ニハ赤露ノ例ヲ模倣シ、一切ノ不平等条約ヲ廃棄スル如キ体度（ママ）ニ出ツル事アルヤモ計リ難シト語リタル由ナルガ、孫文ノ秘書タリシ陳友仁ノ如キモ略同様ノ言ヲ為セリ。即チ "China should adopt the external

policy of the Soviet Government but as regards the latter's domestic policy, China should not follow it, in view of the difference in social conditions between the two countries." 尚陳ハ左ノ如ク言ヘリ。想フニ孫文ガ労農露国ト提携スルニ至リシ原因亦此辺ニ胚胎シタルモノナランカ。"No country could stand alone in the world and so far as the present world situation was concerned, Soviet Russia was much more preferable to China than any other country."

国際問題ニ関シ稍自覚セル支那ノ青年政治家ハ何レモ労農露国ノ対外政策ヲ大ニ歓迎スルハ当然ノ事ニシテ、黄郛、王正廷、王寵惠、顧維鈞等皆然リ。彼等ハ自国ノ現状如何ハ別問題トシテ、不平等条約ハ出来ル丈ケ直チニ之ヲ廃棄シタキ意向ヲ有スルモノナリ。左リトテ彼等ハ決シテ赤化セルニ非ス。蓋シ彼等ノ生活状態（黄、王等ノ如キ何レモ極メテ贅沢ナル貴族的生活ヲ為シ居レリ）ヲ見レバ、思半ハニ過キン云々。

之ヲ要スルニ孫文ト云ヒ、馮王祥ト云ヒ、労農主義ヲ衷心ヨリ賛成セルニ非ス。只労農露国ヲ利用シテ自己ノ目的ヲ達セントシタルニ過キス、恰モ青年政治家及学生連ガ労農主義ニ共鳴スル如キ態度ヲ取リテ国権国利ヲ恢復セントスルガ如シ（此点ニ関シテハ、日本ハ将来満蒙ニ於テ種々ナル難問題発生スルヲ予期シ、今日ヨリ充分研究考慮シ置ク必要アルベシ）。葉恭綽ヨリ広東政府ガ赤化セリト云フハ謬見ナリ。従来労農露国ヲ利用シツヽアリシ一党派ガ勝利ヲ占メ、広東政府ヲ乗取リタルニ過キスト。

備考　赤化問題ニ関シテハ更ニ広東方面ノ実況ヲ視察スル必要アリト思考ス。去月二日小官馮玉祥ニ面会シタル際、馮ノ談話中赤化問題ニ関スル部分（一月四日付既報参照アリタシ）又其際ノ談話中、左ノ如キ一節アリ、報告漏レニ付御参考迄左ニ附記ス。

『中央政府ヲ委員制度トスル事ハ、主義上反対セサルモ、支那現在ノ状態ニテハ委員制度ヲ用フルハ不可ナリト思フ。支那現在ノ腐敗ハ決シテ制度ノ罪ニ非ス。之ヲ運用スル人物如何ニ在リ。徐謙ガ（筆者曰ク徐ハ極端ナル排日家）頻リニ委員制度ヲ主張シ居ルハ事実ナルモ、自分ハ之ヲ排斥セリ。徐ハ夫婦共耶蘇教信者ニテ教育家ナリ。自分（馮）トハ親友ナルモ、政治問題ニ関シテハ自ラ異ナリタル意見ヲ有ス。李不曾ハ極端ナル無政府主義者ナリ。謂ハユル六不主義（不養妾、不賭、不嫖、不作官、不作議員、不吃煙酒）ヲ主張セル人ナリ。自分ハ其主義ニハ賛成セサルモ、友人トシテ常ニ来往ス。李ハ誰ニ向フモ公然其主義ヲ明言シテ憚カラス云々。』

一四　大正十五年二月三日発信

若槻総理ト靳雲鵬対談要領（十五年一月卅一日）

靳氏ハ先ツ過去一年間亀川ニ於ケル日本官民ノ懇切ナル待遇ニ対シテ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表シ、更ニ加藤総理薨去ニ対シテ深厚ナル弔意ヲ述ヘ、ソレヨリ支那ノ政局ニ関シ種々談話ヲ交換シタル後、近来支那ニ於ケル赤露ノ活動ハ実ニ素晴ラシキモノアリトテ其大要ヲ述ヘ、本問題ハ貴国トモ重大ナル関係アルモノナリト信スルニ付、本日田中政友会総裁ニ面会ノ際モ特ニ其注意ヲ喚起シ置キタル次第

ナルカ、尚ホ貴総理ニ於テモ充分御考慮ヲ乞フト語リタルニ対シ、若槻総理ハ大要左ノ通リ答ヘラレタリ。

『支那ニ於ケル赤化問題ハ屢々耳ニスル所ナルモ、自分（総理）ハ余リ深ク本問題ヲ研究シ居ラス。随テ的確ナル意見ヲ申上兼ヌルモ、聞ク所ニヨレバ、貴国ハ社会組織其他諸般ノ点ニ於テ大ニ露国ト事情ヲ異ニシ居ルヲ以テ、支那ニ於ケル赤露ノ運動ハ終局ニ於テ成功セサルベシ、トノ説アリ。現ニ赤露ハ土耳其、埃及、亜富汗斯坦、波斯等ニ於テモ熱心ニ活動シタルガ、遂ニ成功セサリシ実例アリ。又赤露自身ト雖モ今日ニテモ恐ラクハ其主義ヲ全部是認シ居ルニ非ス。只騎虎ノ勢今日遽カニ之ヲ変更スル事困難ナルヲ以テ、其看板ハ変更セサルモ、其内容ニ於テハ実際問題ニ順応スル様多少斟酌ヲ加ヘツヽ、既定ノ方針ヲ無理ニ遂行シ居ルニ非ルカト思料セラル云々』。

斬氏ハ之ニ対シ更ニ大要左ノ如ク言ヘリ。

『支那ハ御承知ノ通リ文化ノ程度極メテ幼稚ナルヲ以テ、一般民衆ハ少数政治家ニ引廻サル、事比較的容易ナリ。曾テ黄巾賊及紅巾賊ノ如キ、或ハ長髪賊ノ如キ、最近ニ於テハ義和団ノ如キ、何レモ最初ハ少数ノ団体ニ過キサリシモノガ遂ニ四百余州ヲ風靡席捲スルニ至リシ実例乏シカラス。故ニ単ニ風俗人情ノ相違ノミニテ赤化ノ憂ナシト早断シ安心スル事能ハス。現ニ最近来支那当局者カ殆ント其取締ニ困難シ居ル各地学生ノ風潮ノ如キモ亦其一例ニシテ、今後若シ赤露ノ魔手、支那ノ軍隊内ニ侵入スル如キ事アラハ、是真ニ由々シキ一大事ニテ今日ヨリ充分其防圧上遺漏ナキ様、来雨綢繆ノ策ヲ講シ置ク事肝要ナリト思考シ居レリ云々』。

大正十五年二月三日記ス

一五　大正十五年二月四日発信

段祺瑞ノ境遇（大正十五年一月四日）

筆者カ段祺瑞ニ面会セシハ客年十二月廿九日午後三時即徐樹錚カ入京セシ翌日ナリシ。当時段ノ邸宅ハ国民軍兵士ノ為ニ厳重ニ警護セラレ、出入ノ人一々誰何セラル。悪ク云ヘハ監禁同様ナリ。然シ彼自身ハ案外平気ニテ大正十三年冬（即入京組閣前）天津ニテ面会セシ時ト大差ナシ。時局ニ関シテ彼ハ大要左ノ如ク言ヘリ。

『今ヤ支那ノ政局ハ混乱ノ極ニ達シ居ルカ此状態ハ当分継続スヘシ。或ハ更ニ一層紛糾ノ度ヲ強ムルヤモ計リ難シ。兎ニ角軍閥ト軍閥ガ互ニ相衝突シ、裏切者ニ裏切者ヲ生シ此ノ如クニシテ軍閥ガ漸次凋落スルノ時機来ルベシ。支那政局ノ安定ハ其時機ノ来ルヲ待ツノ外ナカルベシ』

トテ実力ナク実権ナキ段祺瑞ハ、今ヤ単ニ執政ノ名ヲ擁スルノミニテ野ニ下ル事モ出来ス、全ク其自由ヲ失ヒ居ル事トテ自然ノ成行ニ放任スルノ外何等ノ策ナキモノ、如ク、全然捨鉢的トモ云フヘキ状態ナリシ。尚其際段ハ声ヲ潜メテ曰ク、徐樹錚ハ自分（段）ガ其入京ヲ阻止シタルニ拘ハラス、昨日着京シタルガ彼ハ元来有為ノ人物ナリ。今回欧米ヲ巡遊シテ帰リ更ニ一層練磨セラレ将来支那ノ政界ニ牛耳ヲ執ルモノハ彼ナルベシト恰モ自分ノ子供ガエラクナツテ来タノヲ喜ブ以上ニ満足セル状態ナリシ。当時筆者ハ国民軍一派ノ徐

樹鋒ニ対スル空気険悪ナルヲ感知シ居タルニ付、徐カ引続北京ニ居ルハ危険ナルベキヲ注意シタルニ段ハ大ニ驚キ、稍不安ノ色ヲ起シ、早速徐ニ注意スベシト答ヘタリ。而シテ徐ハ其日午後五時半北京ヲ出発シ、翌三十日午前三時半頃廊房ニテ逮捕セラレ、同六時頃銃殺セラレタル由ナリ。段ハ大ニ徐ノ将来ニ嘱望シ居リシ丈ケ、ソレ丈ケ徐ノ横死ニ対スル失望落胆ノ程度亦一層甚シキモノアリシハ想像ニ難カラス。段ハ徐ノ死ヲ聞キ初メハ之ヲ信セサリシモ、後其事実ナルヲ知ルヤ卒倒シタリト伝ヘラルヽガ、或ハ事実ナラン。

附記　本資料は前述の伝記「船津辰一郎」に収録されている船津氏の日記を閲覧する目的で大阪に赴いたところ、日記はその主要部分が殆んど伝記に含まれていることが判明した。しかし伝記の稿本作成者である大阪府繊維工業協会専務理事永淵周造氏の御好意により、伝記には全面的に割愛されている本資料を閲覧させていただいた。原資料は複写用便箋約八十枚にわたつて書かれ、船津氏自身の手元に残しておいた原本である。なお史料として価値が殆んどないと思われるものを二、三割愛し、便宜上句読点を附した。なお閲覧に当つて紹介の労を執つて下さつた同興紡績株式会社会長立川団三氏、発表について御快諾下さつた前記永淵周造氏に厚く感謝の意を表したい。